

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：32648
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2012～2016
 課題番号：24520438
 研究課題名(和文) 東北方言における音変化とその方向性に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Sound Change in Tohoku Dialects

研究代表者

橋本 文子 (Hashimoto, Ayako)

東京家政学院大学・現代生活学部・准教授

研究者番号：20237928

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、東北方言の子音の特徴とされる力行・タ行子音の有声化、ガ・ザ・ダ・バ行子音の(前)鼻音化、及び母音と子音の無声化の各現象が、現在の東北地方でどの程度見られるのかを検証するため、三つの年代(少年層、中年層、高年層)から方言音声を集め調査を行った。

その調査から、子音の現象については今も中高年層に観察されるが、少年層についてはガ行鼻濁音を除いてほとんど見られなくなっていることがわかった。このことから、これらの子音の現象はあと半世紀もすれば東北方言から消失してしまうのではないかと予想される。

研究成果の概要(英文)： In this research, it was examined to what extent the phenomena of the intervocalic voicing of /t/ and /k/ and the (pre-)nasalization of /b/, /d/, /g/, and /z/, which were characteristic of Tohoku dialects, and the phenomenon of the devoicing of vowels and consonants were found in the present-day Tohoku district. Sound data was collected from three age groups, i.e. the younger, the middle, and the older age groups.

Through the investigation, the phenomena of the consonants were still found among the middle and the older age groups, while the phenomena except for the nasalization of /g/ were rarely found among the younger age group. Therefore, it is predicted that the two phenomena of consonants will disappear in Tohoku dialects in the coming half a century.

研究分野：音韻論 音声学 方言学

キーワード：音韻論 音声学 東北方言 音変化 力行・タ行子音の有声化 ガ・ザ・ダ・バ行子音の(前)鼻音化
母音と子音の無声化

1. 研究開始当初の背景

1993年にPrince & Smolenskyにより提唱された最適性理論は、言語に普遍的な原理や原則、制約を見つけ出し、それらのランキングの違いにより各言語の音韻現象を捉えようとするそれまでの音韻理論の枠組みを大きく変える革命的とも言える理論である。

最適性理論の最大の功績は、言語に普遍的な原理や原則・制約を用いて各言語の音韻現象を表そうとすることにより、個々の言語の音韻現象だけではなく、言語間の類似点や相違点を捉えようとしていることにある。これにより、それぞれの音韻現象が原理や制約のランキングの違いによって表されることで、音韻現象間の繋がりや言語間の共通点や相違点が、言わば可視化して捉えられるようになった。

そのような中、最適性理論が言語に普遍的な原理や原則を見つけ出し、あらゆる言語の音韻現象の説明を目指すものであるなら、最適性理論の枠組みを使って日本語の方言についても捉えることができるのではないかと予想した。

そこで、Hashimoto(2010)では、日本語の東北方言の子音に特徴的に見られる力行・タ行子音の母音間の有声化とガ・ザ・ダ・バ行子音の(前)鼻音化、及び東京方言に見られる有声軟口蓋閉鎖音の鼻音化のゆれの現象について考察し、最適性理論の枠組みを用いて分析を行った。その結果、これらの方言に見られる現象では、有声性と鼻音性に関する二つの忠実性制約のランキングが連続的に一段ずつ上昇していることが明らかになった。それにより、一見するとあまり繋がりがあるように見えない東北方言と東京方言に見られるこれらの現象は、実は共時的にも通時的にも繋がりがあり、一連の連続した音変化を示すものであることがわかる。

2. 研究の目的

東北方言と東京方言に見られる子音の現

象について最適性理論の枠組みを用いて分析を行うことで、方言に見られる現象についても、言語に普遍的と考えられる原理や制約を用いて十分に説明が可能であることがわかった。

東北方言では、よくいろいろな音が有声化したり鼻音化したりすると思われていることが多い。しかし、東北方言の子音に注目して観察していくと、有声化するのは無声子音の中で力行・タ行子音だけであり、しかもそれらの子音はいつも有声化しているわけではないことに気づく。では、力行・タ行子音はどのような場合に有声化され、有声化されるにはどのような条件と環境が必要なのだろうか。また、ガ・ザ・ダ・バ行子音の(前)鼻音化とは、どのような現象なのだろうか。そして、それらの現象にはどのような関係があるのだろうか。

本研究では、実際に東北方言の音声を年代別に調査することにより、現在東北地方でこれらの現象がどの位見られるのか、またどのような音変化が進行していると考えられるのかを考察していく。

3. 研究の方法

東北地方の各県の数か所を調査地として選び、東北方言の子音の特徴とされる力行・タ行子音の有声化、ガ・ザ・ダ・バ行子音の(前)鼻音化、及び母音と子音の無声化の各現象について、それらが現在の東北地方でどの程度見られるのかを3つの年代別に、いくつかの調査形式を用いて調査した。そして、その得られた音声データを、聴覚及び音声分析ソフトを使って分析した。

調査の具体的な方法は、以下の通りである。
(1) 調査地：東北地方の各県で、地理的及び歴史文化的に比較的隔たっていると思われる数か所の地点(地方都市を中心とする)を選び、調査地とする。また、それに加えて、近隣の町を1~2か所選び、同様の調査を行

う。これは、中心となる市と距離的にあまり離れていない近隣の町にも、思いのほか方言が残されていることがあるためである。

(2) 調査対象：少年層（小学校5,6年）、中年層（40代～50代）、高年層（70代～80代）の3つの年代の男女数名ずつを調査対象とする。

(3) 調査項目：力行・タ行子音の有声化、ガ・ザ・ダ・バ行子音の(前)鼻音化、母音と子音の無声化の現象について調べるため、それらが予想される調査語及び文を使用する。

(4) 調査形式： なぞなぞ形式による質問、写真や絵の提示による質問、短い文の読み上げ、簡単な昔話の読み上げ、自由会話(中・高年層のみ)

調査では、いくつかの調査形式を使い、同じ調査語について繰り返し答えってもらうことで、より自然な状態の方言音声を得られるのではないかと考えた。

また、具体的な調査語については、大橋(2002)の調査語を参考にその中からいくつかを選び出したものに、こちらで考えたものを加えた。簡単な昔話については、最初の調査地の八戸市の図書館にあった青森県東部の方言(南部弁)で書かれた子供向けの昔話を各地域で使用した。調査協力者には、その昔話をそのまま読んでも、あるいは自分の地域の方言に替えて読んでも構わないことを伝え、読み上げていただいた。これは、調査項目にある各現象がどの程度現れるかを見るとともに、地域によりどのような語彙や音の違いがあるのかを調べるためでもあった。尚、調査協力者の一人からは、標準語で書かれた昔話をその地域の方言に替えて読んでもらってはどうかという提案をいただいた。

調査地では、調査とともに、地元にある図書館を訪ね、その地域の方言について書かれた文献や埋もれた資料がないかどうかを調べ、購入可能な物については購入した。しかし、時間的制約のために、全ての調査地の図

書館に伺うことはできなかったが、伺った図書館には、必ずと言っていいほど地元の方言研究者による方言集が存在した。図書館の調査では、どの地域にも地元の言葉を大切に思い、保存して後世に伝えたいと思う人たちが少なからずおられることを実感した。

調査は、調査者(研究代表者)が調査地に赴いて、一対一の対面方式で行った。調査の際には、小学生には負担にならないよう調査項目のみの調査としたが、大人の調査協力者については、調査項目とは別に自由会話を人により20分から1時間弱ほど話していただいた。これは、調査項目とは関係のない普段の会話の中に方言特有の音現象が現れやすいのではないかと推測したこと、会話をすることで緊張感が取れ、場が和むのではないかと考えたためでもあった。また、調査者も同じ東北出身であることを伝え、調査協力者の方々は一様に親しみをもって下さったようであった。自由会話の音声データについては、談話分析のデータとしても有用ではないかと考えている。

4. 研究成果

(1) 調査地と調査協力者

次の表は、本調査の調査地と調査人数をまとめたものである。

方言音声調査の調査地と調査人数(調査順)

調査地	少年層		中年層		高年層		計
	男	女	男	女	男	女	
八戸市	2	2	0	2	2	5	13
弘前市	1	0	0	0	2	0	3
青森市	2	2	2	0	1	1	8
秋田市	1	1	1	1	0	2	6
仙北町	1	1	1	1	0	0	4
仙台市	1	1	0	2	2	0	6
三川町	1	1	2	1	1	2	8
鶴岡市	0	1	1	1	2	0	5
一関市	1	1	1	1	1	1	6
会津若松市	1	1	1	1	1	1	6
盛岡市	0	0	1	1	1	1	4
釜石市	0	0	0	1	0	2	3
計	11	11	10	12	13	15	72

本調査では、表に示したように、青森県では八戸市・弘前市・青森市の3市、秋田県では秋田市の1市、岩手県では仙北町・盛岡市・一関市・釜石市の3市1町、宮城県では仙台市の1市、山形県では三川町・鶴岡市の1市1町、福島県では会津若松市1市と、東北6県で計12の市町を調査地とした。調査期間の前半は主に北東北、後半は南東北の各地域を訪ね、各地域で年代別(少年層、中年層、高年層)に、男女数名ずつの少人数による音声調査を行った。

調査協力者は、各地域の地方自治体(市役所等)の関係各機関をお願いして紹介していただいた。調査では、地域により調査協力者がうまく得られなかった場合や、録音がうまくいかなかった場合もあったが、調査全体としては、概ね年代別また男女別ともに平均した数の音声データが得られた。ばらつきはややあるが、全体で少年層として男性11名、女性11名、中年層として男性10名、女性12名、高年層として男性13名、女性15名の計72名から、貴重な音声データが得られた。

調査に伺った各地域では、ご協力いただいた公民館や小学校の各関係機関の方々には温かく迎えていただき、大変お世話になった。また、調査にご協力者いただいた方々には、お忙しい中調査を快く引き受けて下さったことに心より感謝を申し上げたい。

(2) 調査で得られたこと(中間報告)

東北地方の各地域を訪ねて調査しながら改めて気づいたことは、先行研究でも述べられてきたように、北東北と南東北の方言音声にははっきりとした違いが存在するということである。それぞれの地域の方言には、調査した子音や母音の各現象の他に、母音の中舌化や融合、アクセントやリズム、特殊音や拍の長さなどにそれぞれ特徴が見られ、それらが複雑に組み合わせられて、全体として北東北・南東北地域特有の方言が形作られていた。

調査項目では、まず力行・タ行子音の有声化については、北東北・南東北方言地域ともに高年層と中年層に多く見られた。気づいたのは、高年層であってもあまり有声化が見られない人もいる一方で、中年層には安定して有声化が見られたということである。高年層でもあまり有声化が見られない場合でも、母音の中舌化や特有のアクセントなどは見られていた。一方、少年層では、どの地域でも有声化はほとんど見られなかった。このことから、力行・タ行子音の有声化は、今後次第に衰退し消失していくであろうと推測される。

次に、ガ・ザ・ダ・バ行子音の(前)鼻音化のうちガ行子音の鼻音化については、北東北・南東北の各地域で高年層・中年層ともにまんべんなく聞かれたが、同一人の中でも鼻音化される語とされない語があり、その違いについては今後分析を進めていきたい。その一方で、少年層の半分近くでは、地域に関わらず、ガ行子音の鼻音化は見られなくなっていた。そこで、ガ行子音の鼻音化についても、次第に衰退していくであろうと推測される。

また、ザ・ダ・バ行子音の前鼻音化については、北東北方言地域の八戸市と秋田市の高年層に見られたが、南東北方言地域の一関市の高年層と三川町の中年層の中にも語により観察された。ザ・ダ・バ行子音の前鼻音化は北東北方言の特徴とされているが、南東北方言地域の北部にもその現象が今も見られるということは、かつてその現象が南東北方言地域にも存在したということの証左となるであろう。

一方、母音や子音の無声化については、地域差と共に個人差も大きく、また、アクセントや他の要因も複雑に関わるため、分析はまだあまり進んでいない。ただ、一つ気づいたことは、「三つ葉」[mitsuba]という調査語では、子音が無声化した[mitsupa](みつぱ)という発音が、年代や地域に関わらず比較的多く(48名中18名)見られたということである

(但し、青森県の調査では調査語になかったため未調査)。その理由については今のところ不明であるが、今後考察していきたい。

全体として、北東北方言地域の特徴とされるガ・ザ・ダ・バ行子音の(前)鼻音化、及び東北地方全体に見られるとされるカ行・タ行子音の有声化は、それぞれ高年層・中年層では現在も観察される。しかし、一方で、少年層においては、ガ行子音の鼻音化を除いて、それらの現象はほとんど見られず、地域による差も見られなかった。

このことは、現在の中年層から少年層の年代までのここ 30 年ほどの間に、東北方言の子音の現象に大きな変化が起こったことを示していると考えられる。すなわち、今の少年層が社会の中心となる頃には、ザ・ダ・バ行子音の前鼻音化の消失はもちろんのこと、カ行・タ行子音の有声化の現象も見られなくなり、子音については北東北方言と南東北方言の違いが薄れ、標準語に近い状態になるであろうと予測される。

また、調査では、地域的な特徴も見られる一方で、個人差も思いのほか大きく、様々な方言音声が開かれた。さらに、同じ一個人の中でも語によって同じ現象が見られる場合と見られない場合があった。そういった個人による違いや、また、同一人内で語による違いが思いのほか多く見られるという現状は、現在東北方言がダイナミックに変化しつつあるということを示しているのではないだろうか。

今後は、調査で得られたデータをもとに、各現象が起こる条件や環境を詳しく分析するとともに、東北方言で音変化が起こるのはなぜなのか、音変化はどのように進んで行くのかについて探していきたい。また、自由会話についても、その分析を進めていきたい。

(3) 調査の反省点

調査項目

調査の反省点としては、上にも述べたように、最初に調査を行った青森県の調査地点とそれ以降の調査地点とでは、調査語に少し違いがあるということである。これは、青森県の調査を終えた時点で、調査語を加える必要性を感じ、それ以降の調査に新たに調査語を加えたためである。また、実際に調査をしながら、調査語の中に既に日常使われなくなった語や年代によっては知らない語(例えば、臼、鍬、薪など)が含まれていたことに、初めて気づかされるということもあった。

さらに、研究の方法のところでも述べたように、統一を図るために全ての調査地点で同じ昔話を使用した。青森県の南部弁で書かれたものであったため、他の地域の調査協力者にはわからないところがあったようである。昔話については、同一の条件で調査できるよう何か別の方法を考えるべきであった。

このように、実際に調査をして初めて気づくこともあり、改良を図るために調査語などに変更を加えると、同時に調査の統一が取れなくなるという問題が生じる。そのため、調査前にはやはり周到で入念な準備が欠かせないことを痛感した。また、録音についても機器の状態の確認が十分ではなく、録音した音声がかえりにくい場合があり、反省点として挙げられる。

調査年代

小学生は初めて会う相手(調査者)には、標準語で答える傾向が見られた。そこで、自分の言葉が確立している高校生の年代を少年層として調査を行ったならば、普段の言葉としての方言音声がより聞かれたのではないかと思われる。

意識調査

方言に対する意識調査も音声調査と並行して詳しく行うべきであったと感じている。最近では、ドラマの中でも方言がよく使われるようになってきたこともあり、若者の間でも方言に対する意識が変わりつつある。しかし、

今も方言に対してあまり使いたくないという気持ちを持つ人もおり、方言に対してどのような意識を持っているのか、地域による違いはあるのかなど、方言意識と方言使用との関係についても詳しい調査が望まれる。

(4) 展望

方言は、その地域に住む人々の日々の生活や、その地に連綿と続く文化や歴史と強く結びついている。調査協力者の中には、今もかつての北前船や藩制の時代の出来事を熱く語り、郷土に対する強い誇りと愛着が感じられる方々もおられた。

言葉は人と共にある。本調査の結果からも、あと半世紀もすると東北方言からその特徴とされる子音の現象は消失してしまうことが予測される。しかし、郷土を大切に思う人々がいる限り、方言は残り、完全に失われてしまうことはないのではないかと考えている。

<引用文献>

Prince, Alan and Paul Smolensky
(1993) Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar. ms., Rutgers University and University of Colorado. Published in 2004, London: Blackwell.

大橋純一 (2002) 『東北方言音声の研究』
おうふう、東京。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

橋本 文子、東北方言の無声化が語るもの、現代音韻論の動向、査読有、2016、40-43

橋本 文子、東北方言における子音の現象と清濁の音韻論的対立の関わりについての一考察、津田塾大学言語文化研究所報、査読無、30号、2015、37-46

橋本 文子、東北方言における母音の無声化と関連する事象について、音韻研究、

査読有、17号、2014、3-10

橋本 文子、東北方言に見られる無声化の方向性とその多様性について、津田塾大学言語文化研究所報、査読無、29号、2014、37-47

橋本 文子、東北方言に見られる有声化と無声化の現象について、音韻研究、査読有、16号、2013、11-18

橋本 文子、東北方言における有声化と無声化について、津田塾大学言語文化研究所報、査読無、27号、2012、69-81

[学会発表](計8件)

橋本 文子、東北方言の無声化について、東京音韻論研究会、2016年7月30日、「東京大学駒場キャンパス(東京都・目黒区)」

橋本 文子、東北方言の子音の現象と清濁の音韻論的対立の関連性について、東京音韻論研究会、2015年5月30日、「東京大学駒場キャンパス(東京都・目黒区)」

橋本 文子、東北方言に見られる無声化の多様性について、東京音韻論研究会、2014年7月19日、「東京大学駒場キャンパス(東京都・目黒区)」

橋本 文子、東北方言における無声化について、音韻論フェスタ、2014年2月25日、「KKR ホテル熱海(静岡県・熱海市)」

橋本 文子、東北方言における母音の無声化について、東京音韻論研究会、2013年9月14日、「東京大学駒場キャンパス(東京都・目黒区)」

橋本 文子、東北方言に見られる子音の有声化と無声化について、音韻論フォーラム、2012年8月21日、「東北学院大学(宮城県・仙台市)」

橋本 文子、東北方言における子音の現象と母音の無声化について、津田塾大学言語文化研究所プロジェクト・英語の通時的及び共時的研究会、2012年7月28日、「津田塾大学(東京都・小平市)」

橋本 文子、東北方言における同化現象について、東京音韻論研究会、2012年7月8日、「東京大学駒場キャンパス(東京都・目黒区)」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 文子 (HASHIMOTO, Ayako)
東京家政学院大学・現代生活学部・准教授
研究者番号：20237928